

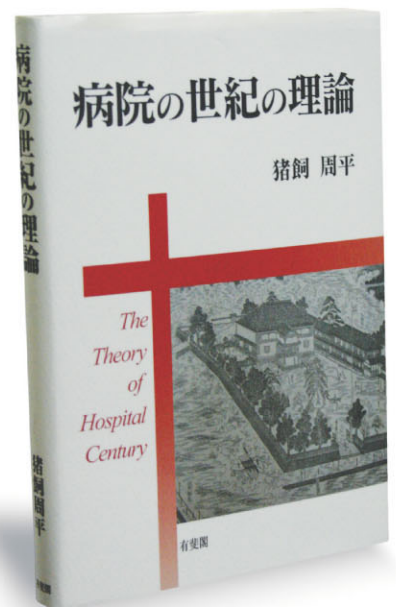


【第47回】

病院の世紀が終焉を迎え、21世紀は新たな医療システムが構築される

中野 一司

ナカノ在宅医療クリニック



本

書では、20世紀とは、「治療」およびそれを支える治療医学に対する社会的期待・信任がもつとも高まった時代であると論じている。この

医療供給システムが非常に強化された時代という意味で、20世紀を「病院の世紀」と呼び、その医療供給システムは大きく、①イギリス型、②アメリカ型、③日本型（プライマリケアとセカンドリケアの混在性と病院閉鎖性）の3つの型に分類して、これら3つの型に関する理論を「病院の世紀の理論」と呼んでいる。

そして、日本型の場合、開業医が病床を所有し、医師と経営者を兼務したところに、日本型医療システムの発展の特徴があり、それが20世紀の日本の医療システムの発展の様相を再構築できると、理論化、考察している。この理論化において、国民皆保険の創設など、日本における医療の社会化現象も、

「病院の世紀の理論」を用い、新たな視点から説明（理論再構築）している。また医局制度の在り方、臨床医のスキルアップの問題、病床の性質、社会的入院の歴史的意味などについても論じている。

本書の大きな目的は、20世紀は、病院（治療医学）が大きく発展した理論的根拠を解説することだが、筆者にとつて最も興味深かった章は、第6章の「病院の世紀の終焉」である。21世紀を迎え、病院の世紀も終焉を迎え、治療が中心となる医療システムは終焉しつつあるとするものである。これは、最近盛んに叫ばれる医療崩壊の問題とも密接に関連する問題である。また、筆者が常日頃提唱している「キユアからケアへのパラダイムチェンジ」理論とも合致する。

病院の世紀の終焉の後現れる新医療システムの最右翼候補は、地域包括ケ

アシステムである。病院医療（治療医学）が全てを賄っていたシステムから、病院医療は新医療（介護）システムの一部となり、大きな地域包括ケアシステムの一部となる。地域包括ケアシステムの一翼は、在宅医療が担うことになり、①病院医療（急性期医療）と②在宅医療（生活を支援する医療）＋介護の連携が、今後大きな医療システムに進展していくと考える。まさに、医療が、医学モデル中心から生活モデルに転換していくことを示している。国際的には、ICDモデル（病気でないことが健康）からICFモデル（病気や障害を抱えても、楽しく生活、社会参加できることが健康）の概念とも一致する。

今後、（病院）医療崩壊後の、新たな医療（介護）システムの在り方のグランドデザインを描くにも、必読の一書であると考ええる。

※中野一司：「多職種連携で機能する地域連携ネットワーク型在宅医療」。治療、5.2009.p1430-1438.

PROFILE

中野 一司（なかの・かずし）
1987年鹿児島大学医学部卒、同大学病院第3内科入局。救急部・検査部などを経て99年ナカノ在宅医療クリニック開設。2008年鹿児島大学医学部臨床教授。医学博士。09年より社団法人全国在宅医療支援診療所連絡会IT・コミュニケーション局長、NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク理事、日本在宅医学会幹事。

『病院の世紀の理論』

猪飼周平 著
有斐閣／2010年／4,200円

Present!



この本を1名様にプレゼントいたします。詳しくは左ページをご参照ください。